2011.12
Vol.11

Shiripaの星

[シリパのほし]

北星学園余市高等学校同窓会誌

H.S

「地元で頑張っている一員として」

二二期　井川　昌寛

平成二十三年三月十一日東日本大震災被災に遭われた方に心よりお見舞いもうしあげます。

私は北星学園余市高等学校卒業後より、父が創立した地元の運送会社に、何の迷いもなく入社。その後何年かは先輩ドライバーと共に現場で働き、以後事務所で配車・営業をしておりました。今から十年ほど前、父の病気が発覚し、徐々に父の仕事も兼務する時期が続き、六年前に父が他界し、悲しみに浸る間もなく、運送会社の二代目として現在に至っております。

当社は、食品配送を中心に北海道はもとより、東北・関東・関西・四国方面を日々走っております。

三月十一日も関東・東北方面で自社のトラックが走っていました。ラジオ・テレビから震災の様子が流れて来ましたが、安否の確認が出来るまでの時間がとても長かったのを今でも覚えています。幸いにも従業員は無事に北海道まで戻って来てくれました。何よりホッとしました。

今年も余市町の青果物を運びました。秋のワイン仕込みに備えて、ブドウも運びました。

間もなく美味しいワインになる事でしょう。

穏やかな気候の緑豊かなこの余市の大地にいつまでも農作物が育つ様見守りつつ、今日も地元で頑張っています。

2010年11月号「現代画報 VOL.164」(株式会社 現代画報社)

感動との出会い

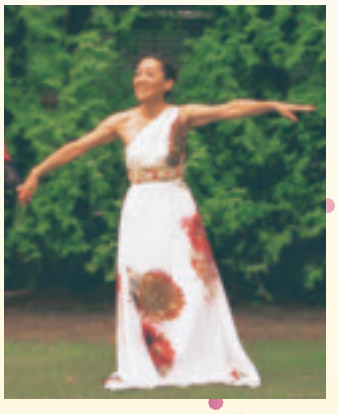
教員OB　中嶋由利子

八年間の教員生活で、最初で最後の担任であった一一期生の卒業と同時に退職しました。退職後、札幌の南区藤野という所で二人の子供と夫の両親と私の母との七人家族でスタートしました。子育てに一段落ついたところで道女子短大の陸上部の指導を依頼されましたが、二年目の時に自分の指導に限界を感じ私の中で陸上競技は終ったと思いました。

その頃たまたまフランスから来たマイムダンサーのスペクタクルを観て大変感動し、自分がやりたいのはこれだと心から思いました。翌年からフランスと札幌を往来しながら、フランスではダンスやマイムの勉強を、札幌では日本文化を学び自分のダンスのスタイルを求め続けました。その間南フランスのアビニヨンで毎年夏に行われるフェスティバルに行く事が出来ました。その時大勢の人に囲まれた広場で自分のダンスを発表した時に感謝の気持でいっぱいになりました。

観ることによる感動と表現することによる感動に強い関心をもち、パリ第五大学でアートセラピーの理論と実践を二年間学びました。

その後、札幌に帰って来ていろいろな所で活動し、そして私の夢であった〝小さなアトリエ〟を自宅に完成させることが出来、平成十五年から定期的にスペクタクルを行っています。表現者と観客がダンスを通して時間と空間を共有する時、何かを感じ、何かに気づくその時に自分は一人ではないことをお互いに発見する。だからこの瞬間が一番幸せです。



ボーッとしてはいない

教員OB　吉田一

退職し今年で三年目に入った。毎日が日曜日の生活にもすっかり慣れてしまった。朝も七時半頃までフトンの中、みんなに言わせると遅いらしい。酒も二日酔いの時以外ほぼ毎日飲めている。飲み会に誘われて断ったことはあまりない。いつも楽しく飲ませてもらっている。

今年は八十七歳になる母を連れて旅をした。春は花見に道南へ、秋は知床クルーズを目的に道東へ、いづれも私の妹と妻に同行してもらい無事に帰れた。母の意欲のあるうちに出かけようと思ってのことだった。

日常的には週二回バドミントンをやっている、妻のサークルに入れてもらった。経験者ばかりのレベルの高いところだった。加えて最近退職した男性二名も加わった。一人は高校バド部の顧問、もう一人は大学、教員時代選手経験者である。つまり私が一番下手なのである。しごかれて一番疲れる立場にいる。それでもおだてられながら、休まず続けている。ヨット部の指導も手伝っている。私自身も乗りたいからやっているのかも知れない。

冬になるとキロロで月に二、三回、ボランティアのパトロールをしている。朝早いのが少々きついが、仕事は天気次第、これに参加するとシーズン券がもらえ、好きな時に行って滑ることができる。毎年深雪を楽しんでいる。という訳で結構やることがあるのである。

「乳がん啓発活動で命の大切さを伝えたい」

一四期　山﨑みどり（旧姓　葛西）

北星余市の同窓生の皆様、お元気でしょうか？　私が在校していた頃の先生方はすでに退職され（吉田美和子先生のみになってしまった。）母校が遠く淋しく感じていた所に、今回の原稿依頼の連絡が入り、遠い記憶を振り返る事で年月の早さに驚いてしまいました。

私は四年前に乳がんになり、初期発見でしたので、温存摘出手術後の今の方が、がんになる前よりもはるかに元気で毎日を過ごしております。病気になったお陰で、自分自身を大切に大事に、命ある事の大切さに気付く事が出来たからです。この乳がん体験を生かし、三年前より乳がんの啓発活動をはじめました。検診を受けていたら、早く発見していたら、早くに治療に繋がっていたら、私のように元気で生きていられます。早期発見なら九割が完治するといわれています。なのに未だに乳がんで命を落とす方が非常に多いのが現状です。唯一、自分自身の手でしこりを発見出来るのが乳がんです。どの病気に関しても同じ事がいえると思いますが、「早期検診」「早期発見」「早期治療」が一番大切です。私が乳がんになった四年前は二十人に一人の割合で発症すると言われていたのですが、今は十六人に一人という確率になっています。数字からも、おわかりのように、〝私はならない〟は大きな間違いで、誰にでもなりうる事と意識してほしいです。四十代中心に発症といわれていましたが、ここ近年は二十代・三十代の方も増えています。お風呂でのセルフチェックもとても大切です。自分自身を大切、大事にする意味でも、是非意識してほしいです。ついつい忙がしさにかまけて、自分の体の事を後回しになっている方が多いようです。

始めは、初期にそれも自分の手でしこりを見つけれた事で、ラッキーな命と思い、後半に入った人生、ほんの少しでも誰かの役に立てたら良いなあ、位の気持ちでのスタートだったのですが、同じ体験者の話を聞き、学ぶ事で、知らない事で損をしている事の多さに驚かされました。早くに発見に結びつくにはやはり検診が一番なのに、正しく理解している方が非常に少ない、それには正しい情報が大切です。今の時代情報が多すぎて選択するのが困難の時代ともいわれていますので、正しく伝え、正しく理解してもらうため、会のメンバー共々学んでいます。乳がん啓発活動を通じ、人との出逢い、繋がり、大勢の方々に助けられ、学べる事に感謝し、これからも、無理をし過ぎず、細く長く、命の大切さを伝え続けていきたいと考えています。

「近況報告～希一、ガンちゃん元気ですか」

三三期　越智　晶人

私はこの春小学校の教師になりました。

他者と交わることのよろこびを教えてもらった北星余市を卒業して十二年。私は今、札幌市の小学校にて期限附教諭として勤務しております。今年、六度目の挑戦で、北海道教員採用試験に合格し、来年から正採用として教師となることになりました。

北星余市を卒業後、大学を卒業し、世界を一周し、幼稚園に勤め、もう一度大学に入り児童館に勤め、期限附を経て夢を叶えました。

その間ずっと目標に向かえていたのは、北星での日々があったおかげだと振り返っています。「それでいいんだ」と言われ続けた高校時代でした。私も、子どもに「それでいいんだよ」と言い続けられる教師になりたいと思います。

北星余市高校　同窓会報
シリパの星に寄せて

学校長　**安河内　敏**

二〇一一年三月十一日は本校ではちょうど三学期の終業式の日でした。例年のように学年末の教員会議を行っていた午後に、あの未曽有の大地震が起こりました。三階の会議室で今までに経験したことのない、地震というよりは大きな船が嵐の中で揺れているような揺れに、ようやく最後の方で地震だったと認識した次第でした。揺れが収まり、余震も感じなかったので、そのまま会議を続行していました。今思えばこうした時の防災意識を持っておかなくてはならなかったと思います。しかし本当に大変だと思ったのは、休憩時間にみんなでテレビを見たときでした。おそらく宮城県でのものだったと思いますが、津波と火災に見舞われている映像が飛び込んできました。その日は、終業式が午前中に行われたため、幸いにも生徒たちは地元に帰る前でした。そのため、被災地には在校生はたまたまいなかったのです。しかし実家の状況が心配でしたので、すぐに被災の確認を行いました。携帯やメール等で次の日の朝には被災状況が確認でき、建物の被害がある等はあったものの、人命にかかわるものや、避難所へ避難したというものはありませんでした。不安と安堵が入り混じった複雑な思いがありました。しかし卒業したOBに関しては被害状況の全貌は掴めておりません。お見舞いを申し上げますとともに、状況をお教えくださいますようにこの紙面を通じてお願いさせていただきます。写真・名簿など失われたものがありましたら、出来る限りの事をさせていただきます。

さて、こうしてスタートした二〇一一年の四月から、幅口校長に替わって私が校長の任を担うことになりました。数年来、縷々語られてきた生徒減による存続の危機、専任教員の急な入院による代替教員探しなど、その職務のことを考えるよりも先に事態の方がやってくるという状況に、むしろ早く鍛えられて、とにかく動けという天の声が聞こえてくるようでした。

今年度の入学生は五十八名（一クラス平均十八名）という史上最少の入学生の中で始まりました。本当に待った無しの状況にあります。しかし私はこうした状況の中でも北星余市は大切で消えてはいけない教育を行っていると考えています。先日教育学者の大田堯氏を追ったドキュメンタリー映画をみました。その中で大田氏は子どもの育ちに効率や効果を求めてきた教育の結果が今の子どもたちの育ちに様々な問題として出てきていると話されていました。世の中は社会のどこかに潜り込み、そこに合うサイズの人間になることを強要してきました。一見無駄に見える回り道を排除してきました。その結果大人たちは子どもたちに希望を語ることが出来なくなってしまいました。

身近な子どもをないがしろにして国際化を唱えても、中から崩れていくでしょう。

今までもこれからも、私たちが大切にしてきた教育を続けていく意味がここにあります。皆様のまわりに困っている若者・親の方がいましたら、どうか北星余市の事をお知らせくださいますようお願いいたします。

編集後記

来年３月、長女が札幌の高校を卒業します。４月からはおそらく東京で大学生になります。娘には夢があり、その夢を叶えるため東京の私大に進学したい、と努力を重ねていました。しかし、親は学費や東京での生活費を考えると、途方もない金額に現実的ではないような気がして賛成し兼ねていました。

でも娘は諦めませんでした。遠い地で大きな災害に遭うかもしれない不安にも、スタート前から背負った多額の借金（高額の奨学金）にも、恐れることなく、そして全くぶれることなく自分の未来像を熱く、そして冷静に描いていました。

この広報誌が皆さんのお手許に届く頃、娘は受験勉強の追い込み真只中です。４月にどの大学の前で記念写真を撮ることになるかはまだわかりませんが、必ず自分の想いを叶えてくれると思います。

逞しく育った娘は親元を離れ、なお一層逞しく成長していくのでしょう。私もまだまだ負けていられません。

（え）

Shiripaの星　Vol.11
2011年12月24日発行

[発行] 北星学園余市高等学校同窓会「シリパの星」編集委員会
〒046-0003　余市郡余市町黒川町 19 丁目 2 番地 1
TEL(0135)23-2165　FAX(0135)22-6097
URL http://www.hokusei-y-h.ed.jp/

顧　　問　塚原　治
編 集 長　松村　悦子（15期）
副編集長　松浦　一法（12期）
編集委員　安藤　栄子（１期）
本間美智子（５期）
馬場　希（12期）
平野満寿美（14期）

訃報

お悔み申し上げます。

一六期　土井　正
五　期　日置　優
一七期　小助川　計

同窓会把握分